

『明実録』『清実録』中琉関係記事データベース

川勝 賢亮：九州大学文学部

一、『明実録』中琉関係記事データベース

(1) 『明実録』とは

『大明実録』、俗に『皇明実録』また、略して『明実録』という。明太祖洪武帝から熹宗天啓帝に至る十三帝の実録である。通行二九九九巻、内閣大庫紅格本系統の抄本は三〇五八巻であり、巻数は一定していない。各帝代の実録名称、巻数は次の通りである。()内巻数は内閣大庫紅格本の巻数。

大明太祖高皇帝実録 洪武 二五七巻 永楽一六年(一四一八)戸部尚書夏言吉等進実録表
大明太宗文皇帝実録 永楽 一三〇巻(二七四巻)

大明仁宗昭皇帝実録 洪熙 一〇巻 宣徳五年(一四三〇)英国公張輔大学士楊士奇等表

大明宣宗章皇帝実録 宣徳 一一五巻 正統三年(一四三八)英国公張輔大学士楊士奇等表

大明英宗睿皇帝実録 正統 三六一巻 成化三年(一四六七)会昌侯孫繼宗等表

大明憲宗純皇帝実録 成化 二九三巻 弘治四年(一四九一)英国公張懋大学士劉吉等表

大明孝宗敬皇帝実録 弘治 二二四巻 正徳四年(一五〇九)英国公張懋大学士李東陽表

大明武宗毅皇帝実録 正徳 一九七巻 嘉靖四年(一五二五)定国公徐光祥大学士費宏等表

大明世宗肅皇帝実録 嘉靖 五六六巻 万曆五年(一五七七)英国公張溶大学士張居正等表

大明穆宗荘皇帝実録 隆慶 七〇巻 万曆二年(一五七四)英国公張溶大学士張居正等表

大明神宗顯皇帝実録 万曆 五九四巻(五九六巻)

序 大明光宗貞皇帝実録 泰昌 八巻

大明熹宗天啓皇帝実録 天啓 八四巻(八七巻存七四巻)

大明熹宗(折+心)皇帝実録 天啓 八四巻(八七巻存七四巻)

通行本とは近世江戸時代より日本に写本で伝来して宮内庁書陵部、国会図書館旧上野図書館蔵、国立公文書館内閣文庫、東洋文庫、東京大学東洋文化研究所、京都大学中央図書館などに現存する諸写本、一方、旧江蘇省立国学図書館本と呼ばれ戦前に南京で景印されたものなどを言う。これに対して清朝内閣大庫に所在して紅格本と呼ばれる善本が旧北平図書館蔵本に現存し、それが台湾中央研究院歴史語言研究所の校勘合によって同機関から景印刊行された。他の写本、伝本に比して絶対的に善本というべき写本ではあるが、にも拘らず、誤字脱字は免れず、他本との対校は必要である。太祖洪武から武宗正徳までは宮内庁本が比較的善本であるのは北平図書館本に比しても言えるが、しかし、洪武から正徳まで一貫して良いかといえれば否である。全般的な善本は北平図書館旧内閣大庫の紅格本である。世宗嘉靖と穆宗隆慶は国会図書館旧上野図書館写本が良く、紅格本と並ぶ。神宗万曆、光宗泰昌、熹宗天啓は旧北平図書館本紅格本が善本で戦前時期にこれを転写した東洋文庫本、京都大学図書

館本が良い。江蘇図書館本は誤字脱字が多い他、光宗泰昌実録を全く欠き、熹宗実録天啓四年の本文は『国@（加）』より取り、細注は『兩朝從信録』などを参照して作成した。国会図書館日上野図書館本の神宗万曆実録の大部分と光宗泰昌、熹宗天啓も実録ではなく、『起居注』であるが、利用価値は高い。江蘇図書館本には『崇禎実録』があるが、実録ではなく民間の編纂物である。内容は有用である。二系統の明実録の巻数は太宗永楽実録が大幅に異なり、他は全く一致するか、大差のないものである。太宗実録は巻二十六以下が江蘇図書館本一卷を紅格本二巻以上に分割、増巻しているからである。

なお、台湾中央研究院歴史語言研究所刊行の『明実録』には次の八点が付録となっている。

明 宗 皇帝実録 天啓七年九月至十二月

崇禎実録 崇禎元年正月至十七年三月

明熹宗七年都察院実録十四卷、存十三卷

崇禎長編 存六十六卷、又二卷

皇明宝訓四十卷

大明神宗顯皇帝宝訓、存十二頁

大明光宗貞皇帝宝訓、存七頁

大明熹宗@（折+心）皇帝宝訓、存五十三頁

実録とは関係のない民間編纂物などであるが史料としては有用である。

『明実録』の研究論文は、戦時中に江蘇図書館本が刊行されたことが契機になって、以来研究が盛んになったが、三田村泰助「明実録の伝本について」『東洋史研究』八巻一号、1943年。Franke, W.; Zur Kompilation und Überlieferung der Ming Shih-lu, Sinologische Arbeiten (中徳学誌) 5巻1、2号、1943年。浅野忠允「明実録雑考—影印本を中心として」『北亜細亞学報』三号、1944年。今西春秋「明の起居注に就いて」『史林』十九巻四号、二十巻一号、1934、35年、が続いた。その後、間野潜竜「明実録の研究」『明代満蒙史研究』1963年、同「皇明実録私考」『神田（喜一郎）博士還暦記念書誌学論集』1957年がある。

(2) 『明実録』と中琉関係・環シナ海地域間交流史研究

『明実録』が中琉関係ないし環（東・南）シナ海地域間交流史関係史史料に重要視される契機は、戦前に江蘇図書館本が南京で景印刊行されたことによるが、それ以前の時期からも宮内庁書陵部本や日上野図書館本の利用によって部分的には研究は開始されていた。秋山謙蔵氏の『日明関係』岩波講座日本歴史、1933年、同『日支交渉史話』内外書籍、1935年、同『日支交渉史研究』岩波書店、1939年がいずれも『明実録』を使用して日明関係、倭寇の研究を行い、特に後期倭寇が中国人海賊であること断じた。その他、藤田元春『日支交通の研究—中・近世篇—』1938年、小葉田淳『中世南島通交貿易史の研究』日本評論社、1939年、『中世日支通交貿易史の研究』刀江書院、1941年がいずれも『明実録』をよく利用し、以降の『明実録』利用の定形をなした。戦後の日明関係史は石原道博『明末清初日本乞師の研究』富山房、1945年が一早い、『明実録』の欠ける明末崇禎年間以降を扱っている、『明実録』使用は顕著ではない。戦後の日明関係史の研究者では日本史の田中健夫、東洋史の佐久間重男両氏の著作が多い。田中健夫『中世海外交渉史の研究』東京大学出版会、1959年、同『倭寇と勘合貿易』至文堂、日本歴史新書、1961年、同『中世対外関係史』東京大学出版会、1975年、同『対外関係と文化交流』思文閣出版、1982年と続き、佐

久間重男氏に『日明関係史の研究』吉川弘文館、1992年があり、両氏の研究ともに『明実録』の利用が徹底している。なお、史料集としては、『中国・朝鮮の史料における日本史料集成 明実録之部(一)~(三)』国書刊行会、1975年、湯谷稔編『日明勘合貿易史料』国書刊行会、1983年、及び、台湾の鄭@ (木+梁) 生編校『明代倭寇史料(一)・(二)』台湾、文史哲出版社、1987年があり、いずれも『明実録』を基本史料としている。

琉球・明・環シナ海地域間の関係史は、日清戦争当時、幣原坦「琉球の支那に通ぜし端緒」『史学雑誌』6編9号、1895年に始まり、戦前期に秋山謙蔵「室町時代に於ける琉球と印度支那諸国との交通」『歴史地理』56巻6号、1930年、及び、三浦周行「明末時代に於ける琉球所属問題」『史学雑誌』42編7号、1931年、三国谷宏「明と琉球との関係について」『東洋史研究』3巻3号、1938年、小葉田淳「近世初頭の琉明関係一征縄役後における」『台北帝大文政学部史学科年報』7号、1942年と続き、東恩納寛惇『黎明期の海外交通史』1941年に大きな成果を生んだが、以上の諸研究では未だ『明実録』の利用は十分とは言えなかった。『明実録』使用により劃期的論文を作成したのは、山本達郎「鄭和の西征 上・下」『東洋学報』二一卷三、四号、1934年である。しかしながら、環シナ海地域、特に南海、東南アジア史の研究は漢文史料と蘭、英、ポルトガル、スペイン等欧州諸史料、それに当該地域史料の合作によって為されるものであり、その成果は前記、小葉田惇氏の諸著の他、岩生成一『南洋日本町の研究』一九四〇年、同『朱印船貿易史の研究』1958年、山本達郎『安南史研究』1950年がある。それでも琉球史研究においては、特に今時大戦沖縄戦に史料が焼尽に帰し、漢文史料の利用が改めて見直されに至った。漢文史料故に東洋史研究者の参加が目立った。和田久徳「明実録の沖縄史料」(1)『お茶の水女子大学人文科学紀要』24巻2号、1971年、(2)『南島史学』1号、1972年、佐久間重男「明代の琉球と中国との関係一交易路を中心として」『明代史研究』3号、1975年、陳哲雄「明清両朝と琉球王国交渉史の研究」『琉球史学』8、9、13号、1976、7、83年、野口鉄郎『中国と琉球』1977年、外間みどり「万暦中・後期における対琉球姿勢の一側面」『琉大史学』15号、1987年、和田久徳「琉球国の三山統一再論」『東方学会四十周年東方学論集』1987年、川越泰博「『明実録』稿本所載の琉球国記事について」『日本歴史』519号、1991年、宮田俊彦『琉明・琉清交渉史の研究』1996年、等が『明実録』関係史料によっている。

『明実録』を史料として東南アジア諸国・諸地域史を考察しようとする研究には、桑田六郎「明実録より見たる明初の南洋」『台北帝大文政学部史学科年報』4号、1937年、加藤保「『明実録』に見えたるアユチア初期王統について」『史学研究』68号、1957年、藤原利一郎「明初における暹羅との交渉」『史窓』21号、1962年、同「永楽時代における明と暹羅との交渉」『史窓』22号、1964年、同「黎朝前期の明との関係」『ベトナム中国関係史』、1977年、山本達郎「明のベトナム支配とその崩壊」、同前著、大沢一雄「黎朝中期の明・清との関係」、同前著、根本文夫「明実録に見える暹羅の記事」『上智史学』30号、1983年、野村亨「明代中期の中国・ジャワ関係」『現代アジアと国際関係』1991年、等がある。

二、『清実録』中琉関係記事データ・ベース

(1) 『清実録』とは

清朝では太祖より徳宗まで11代の皇帝に実録がある。各帝の実録は漢文、満文、蒙古文の三体文字で書かれ、装丁によって大紅綾本、小紅綾本、小黄綾本の種類がある。大紅綾本は北京皇史宬(ウ+成)及び奉天大内に、小紅綾本は北京乾清宮及び内閣実録庫に、小黄綾本は内閣実録庫に、そして修改の稿本は国史館に蔵せられていた。日本の各大学、東洋文庫等図書館、研究機関には1937年に満洲国国務院において、奉天故宮蔵の大紅綾本実録の漢文が縮刷景印された実録がある。それは、高宗乾隆帝初年の乾隆4年(1740)改修の『太祖高皇帝実録』10巻、『太宗文皇帝実録』65巻、『世祖章皇帝実録』144巻、雍正9年(1742)纂修の『聖祖仁皇帝実録』300巻、乾隆6年(1742)纂修『世宗憲皇帝実録』159巻、嘉慶12年(1807)纂修『高宗純皇帝実録』1500巻、道光4年(1824)編纂『仁宗睿皇帝実録』356巻、咸豊6年(1856)纂修『宣宗成皇帝実録』476巻、同治5年(1867)編纂『穆宗毅皇帝実録』374巻、1921年編纂『徳宗景皇帝実録』597巻の11朝実録の他に、『満洲実録』8巻と『宣統政紀』70巻が収められている。『清実録』は『明実録』とは異なり、各皇帝代の巻数や内容、文字等にほとんど異同が見られない。従って、『清実録』の研究は満洲国初期の太祖ヌルハチや太宗ホンタイシ時代の実録を除けば、研究が行われていない。